

C-54 単衣長着の居敷あてに関する研究

相模女大学芸 〇永井房子 立正女大教育 瀧瀬千代 佐藤由紀子

目的 単衣の中でも浴衣や木綿の長着は、休養着として又生活にうるおいと変化をもたらす衣服として、男女を問わず着用されている。従って、その性格からして洗濯による形くずれを見逃すことはできない。そこで居敷あてをとりあげ、洗濯による居敷あてのつけ方及び材質の違いによる変化を比較検討したのでその結果を報告する。

方法 試料として表布に浴衣地、居敷あて布に材質の異なる6種類を用いた。①下部裁ち目のしまつ6種類、②背縫い代へのとめ方6種類、③両横下部のとめ方3種類、④上部角のしまつ2種類、以上を組み合わせ実物大の後身頃を作製した。洗濯回数1, 3, 5, 10, 15回とし熟練した縫製者により形くずれの状態を判定した。

結果 ①下部裁ち目のほつれ一三つ折ぐけは縫製に要する時間や多少厚くなる欠点はみられるが、15回洗濯後ましまつの変化はほとんどなかった。伏せ縫いは1回洗濯後にほつれがみられた。②背縫い代へのとめ方一居敷あて布と背縫い代に糸を2度かける方法は15回洗濯後も変化なかった。玉どめのみのものは背縫いと居敷あてとの間の糸がゆるんだ状態になり適当でなかった。③両横下のとめ方一表地に2針かける方法は形くずれが少なく、玉どめによる方法は玉が織糸の間から抜け好ましくなかった。④角のしまつ一上部を四角に折る方法は三角に折る方法より形くずれが少なかった。⑤居敷あての材質の違いによる変化については、共布、綿、新モスの順で形くずれが小さかった。